

東中国山地緑の回廊

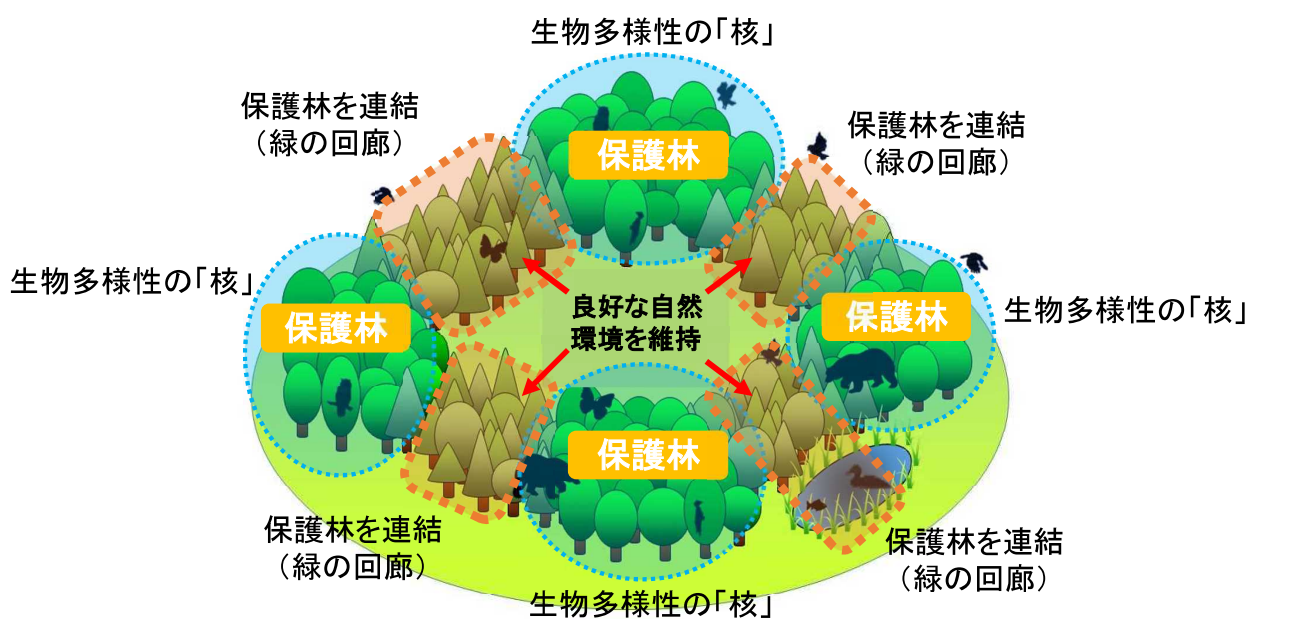
①行動指針(案)

②モニタリング調査における 「基準・指標」及び「調査項目・調査手法」

の作成についての報告

近畿中国森林管理局

「緑の回廊」とは

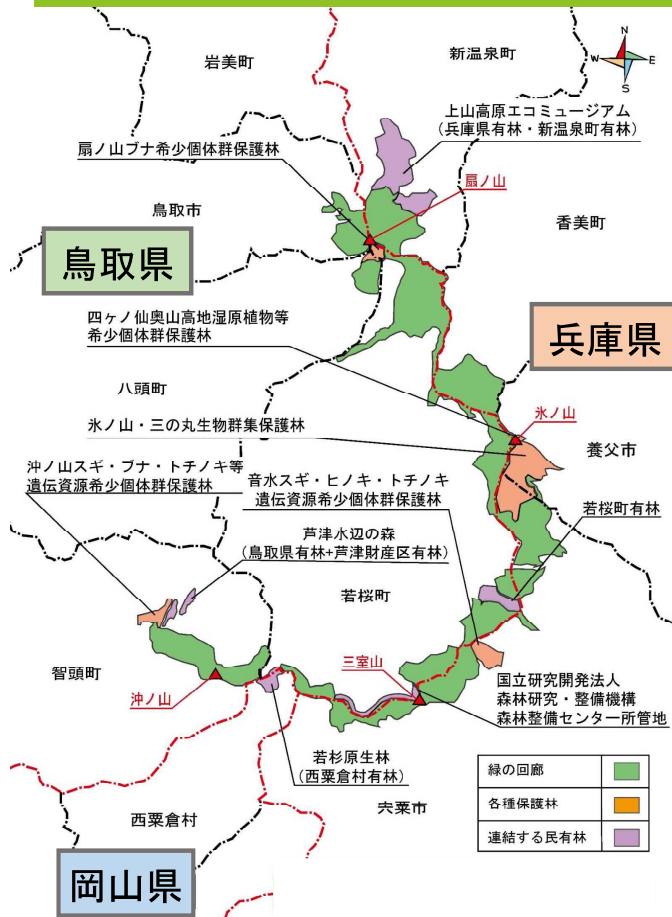


「緑の回廊」の
コンセプト

全国24か所(局管内3か所)

保護林を核とした
良好な自然環境のつながりを保全

東中国山地緑の回廊



- 3県にまたがり、三室山から北には氷ノ山、扇ノ山へ、西には沖ノ山へ連なる延長約42kmの山岳地帯
- 半分程度が主にスギ人工林となっており、その中に天然林が点在
- 民有林も緑の回廊の一部として構成することにより、連続性を確保

保護林	600ha
緑の回廊	6,200ha
連結する民有林	900ha

人工林	52%
天然林	45%
岩石地・草地等	3%

行動指針(案)の作成について

- 東中国山地緑の回廊では、自然生態系のつながりを確保する観点から、約5割の面積を占めるスギ・ヒノキ人工林を、ブナ等の高木性広葉樹が混交した多様な樹種からなる森林へ段階的に誘導することとしている。
- しかし、実際にどのような森林施業を行っていくかを考える際に参照する指針が定められていない状況にある。
- このため、当面の間(今後10年間程度)に進めるべき森林施業の基本的な考え方を「行動指針(案)」として整理することとした。

針広混交林化を進めるに当たって留意すべき事項

ニホンジカによる森林被害

区域内にはニホンジカによる森林被害が甚大な箇所があり、混交林化を進める前に、まずシカ駆除対策等を行う必要がある。

イヌワシの存在

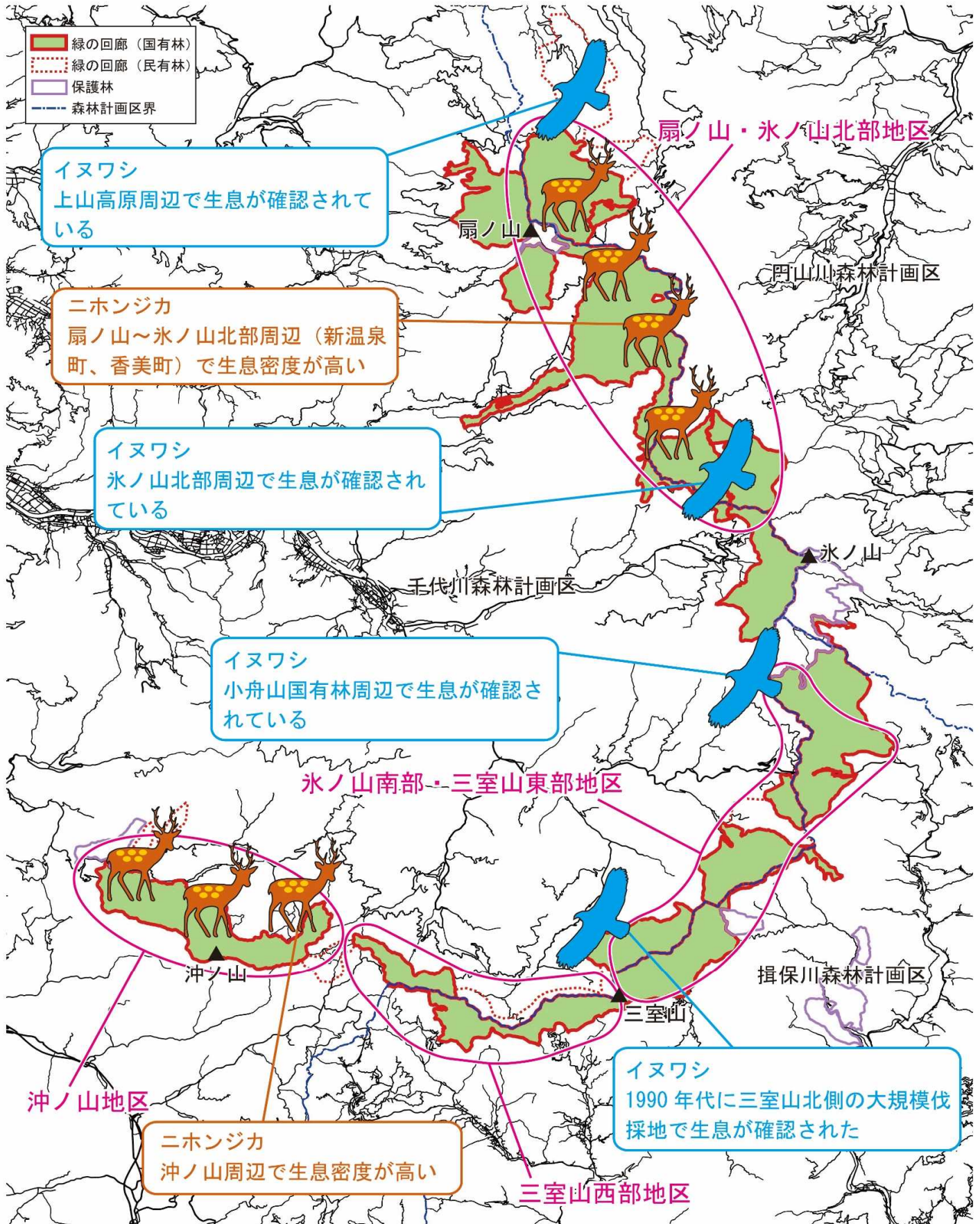
区域内には希少種であるイヌワシの行動が観察されている箇所があり、狩場として利用可能な開けた空間を確保することが重要である。

留意事項を踏まえた地区区分

留意すべき事項である「ニホンジカによる森林被害状況」と「イヌワシの利用状況」に着目し、回廊内の地区区分を行った。

	シカ被害が軽微	シカ被害が甚大
イヌワシの利用なし	三室山西部地区	沖ノ山地区
イヌワシの利用あり	氷ノ山南部・三室山東部地区	扇ノ山・氷ノ山北部地区

地区区分の状況



扇ノ山・氷ノ山北部地区での当面の施業方針

(シカ被害、イヌワシ利用ともにあり)

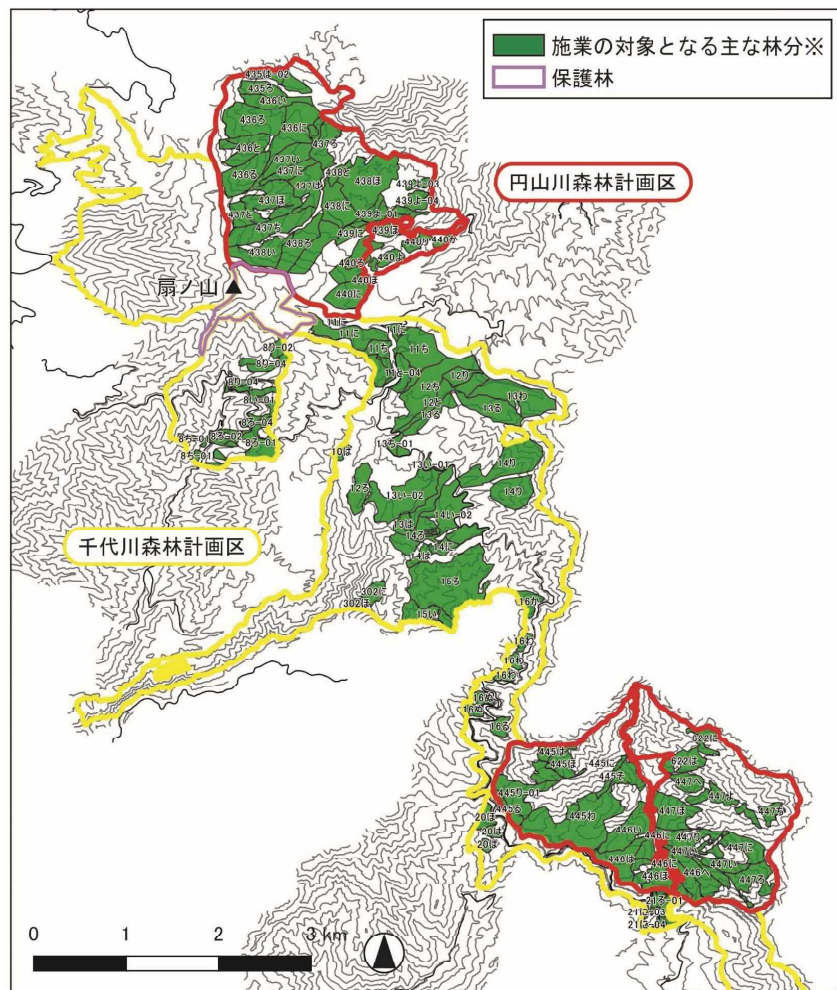
「シカ対策実施」→「針広混交林化(狩り場創出)」の二段階で施業を進める。

【ステップ 1】

- シカ被害がなくなるまでは主伐を控え、シードソース樹(※後述)の育成を進める。

【ステップ 2】

- シカ駆除後、森林被害が見られなくなった時点で、主伐を進める。主伐は、イヌワシの狩場創出に配慮した森林整備を行う。



※水源涵養タイプのスギの単層林

ステップ1:シカ食害下での取組

- シカ被害がなくなるまでの間は主伐を控える
- ニホンジカの生息密度の低減を推進しながら、将来の広葉樹林化を視野においた広葉樹種子供給源(シードソース樹)の育成(※)を進める
- 早期の間伐に努める

※シードソース樹の育成

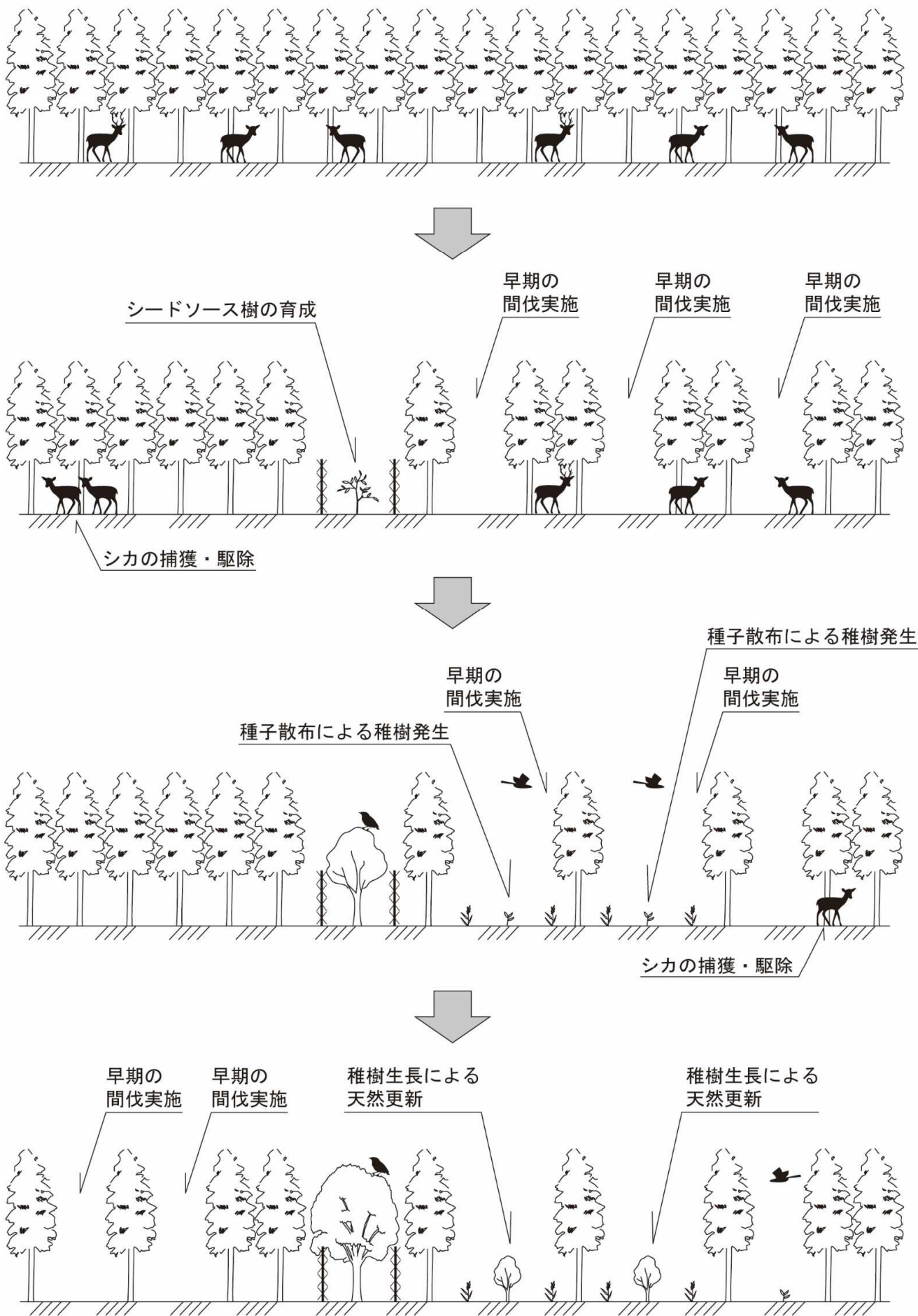
- 人工林内にて小面積伐採(例えば30m×30m)を行い、広葉樹を植栽
- 植栽樹種はミズキ等の液果樹種で鳥散布のものが主体
- できる限り大苗を使用
- 柵でシカ被害対策をする

ステップ2:シカ駆除後の取組

- ニホンジカの生息密度が低減し、森林被害が見られなくなった時点で、主伐の実施を進める
- 植栽樹種は、高木性広葉樹を検討する。天然更新している高木性広葉樹については積極的に保残する
- 回廊外の森林も含めて、主伐実施個所の配置や主伐実施時期の調整を行い、イヌワシが伐採地を狩場として利用できる状態が長期間継続するよう努める

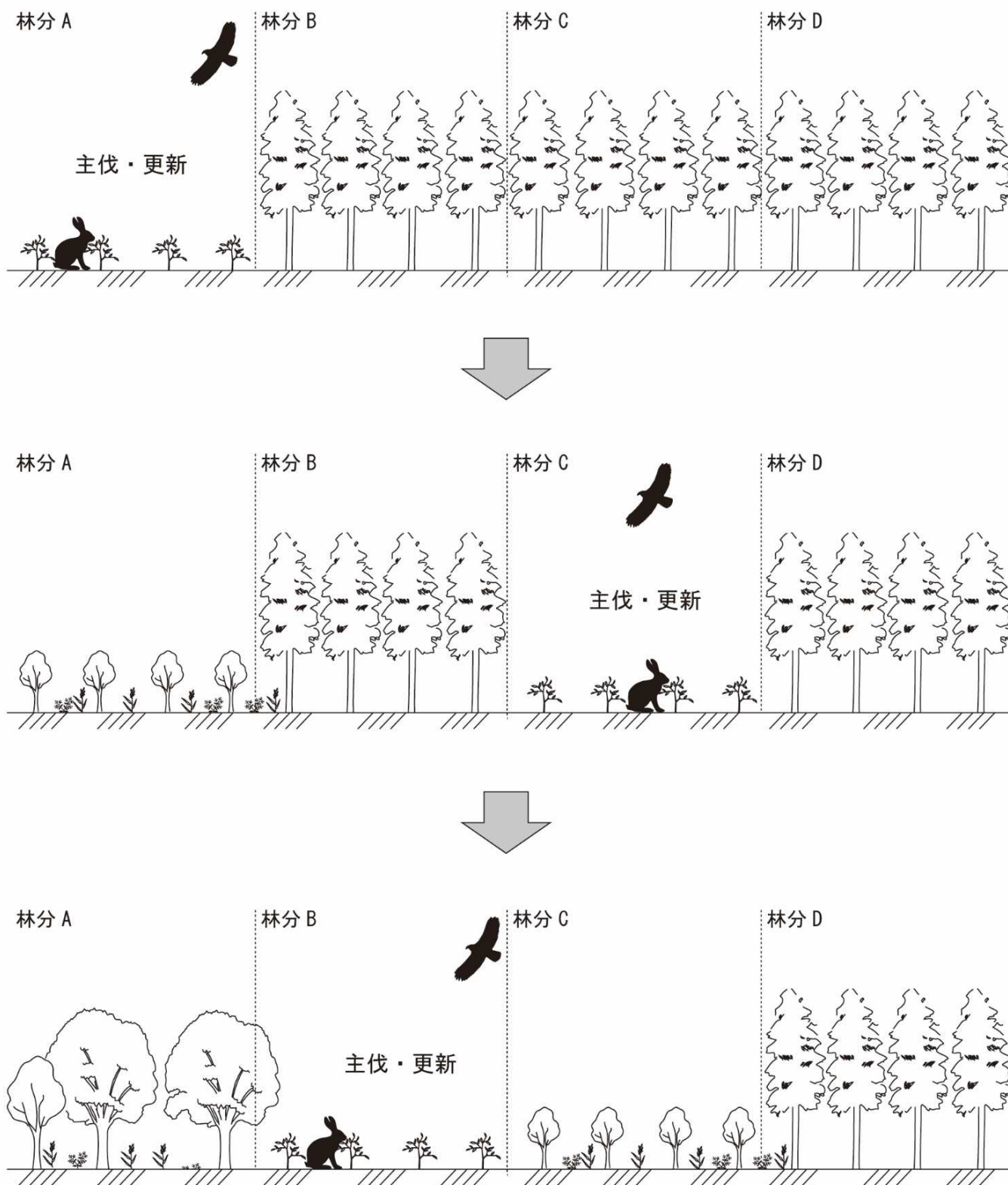
扇ノ山・氷ノ山北部地区における施業イメージ（ステップ1：シカ食害下での取組）

主伐を控え、将来の針広混交林化に向けた下地づくりを実施



扇ノ山・氷ノ山北部地区における施業イメージ（ステップ2：シカ駆除後の取組）

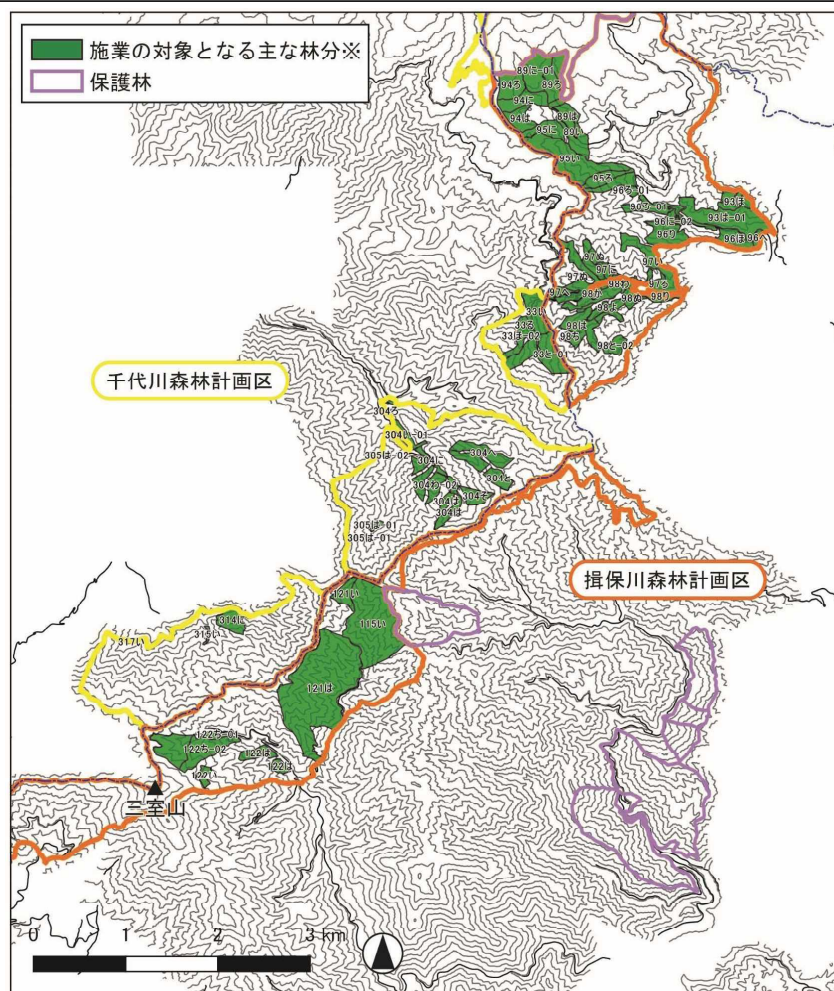
計画的に主伐を進めることにより、イヌワシの狩場を長期的にわたって維持



氷ノ山南部・三室山東部地区での当面の施業方針

(シカ被害なし、イヌワシ利用あり)

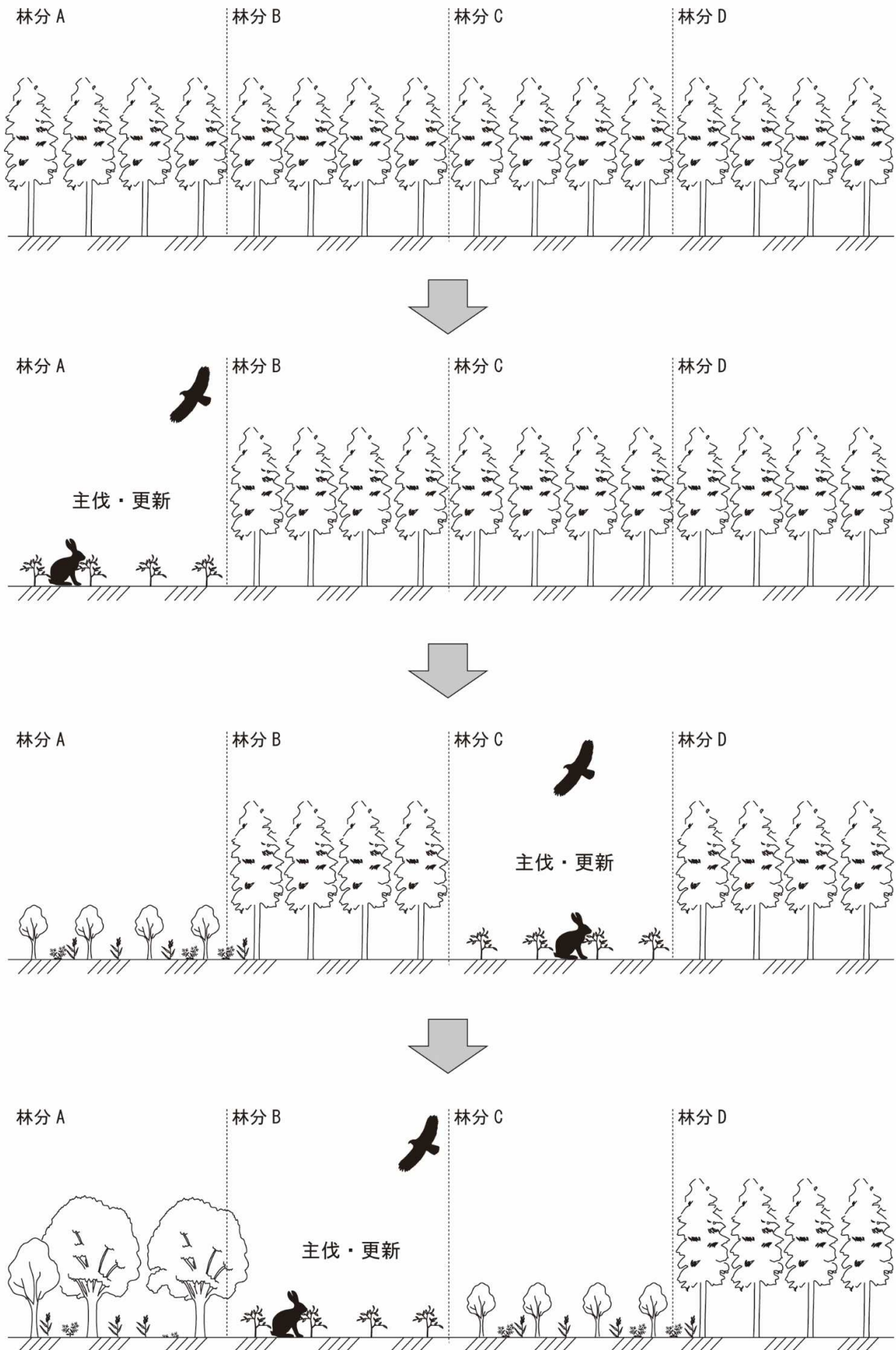
- 主伐を進め、イヌワシの狩場を創出する。
- 伐期を迎えた林分のうち条件の良い箇所では、主伐・更新を行い針広混交林化、広葉樹林化を進める
- 植栽樹種は、高木性広葉樹を検討する。天然更新している高木性広葉樹については積極的に保残する
- 回廊外の森林も含めて、主伐実施個所の配置や主伐実施時期の調整を行い、イヌワシが伐採地を狩場として利用できる状態が長期間継続するよう努める
- 条件の良い箇所では高齡級間伐を継続しながら、天然力を活用した針広混交林化を目指す



※水源涵養タイプのスギ・ヒノキの単層林・複層林

氷ノ山南部・三室山東部地区における施業イメージ

計画的に主伐を進めることにより、イヌワシの狩場を長期にわたって維持



三室山西部地区での当面の施業方針

(シカ被害、イヌワシ利用ともになし)

- 主伐を進める。

- 伐期を迎えた林分のうち条件の良い箇所では、主伐・更新を行い針広混交林化、広葉樹林化を進める
- 植栽樹種は、高木性広葉樹を検討する。天然更新している高木性広葉樹については積極的に保残する
- 条件の良い箇所では高年齢級間伐を継続しながら、天然力を活用した針広混交林化を目指す



※水源涵養タイプのスギ・ヒノキの単層林

沖ノ山地区 当面の施業方針

(シカ被害あり、イヌワシ利用なし)

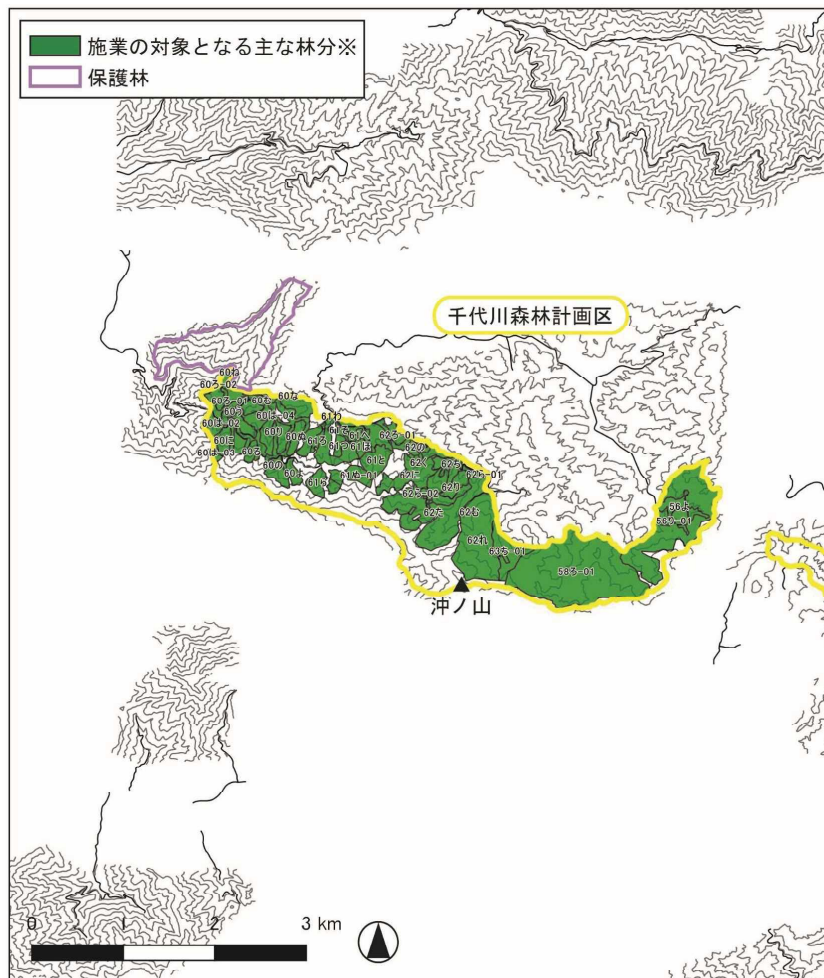
「シカ対策実施」→「針広混交林化」の二段階で施業を進める。

ステップ1:シカ食害下での取組

- シカ被害がなくなるまでの間は主伐を控える
- ニホンジカの生息密度の低減を推進しながら、将来の広葉樹林化を視野においた広葉樹種子供給源(シードソース樹)の育成を進める
- 早期の間伐に努める

ステップ2:シカ駆除後の取組

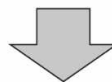
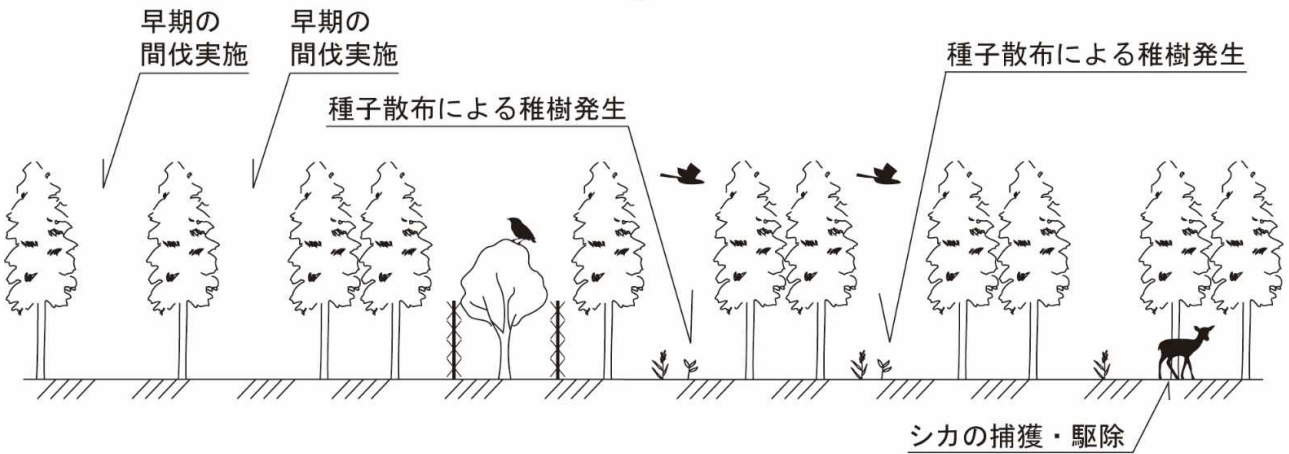
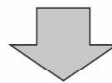
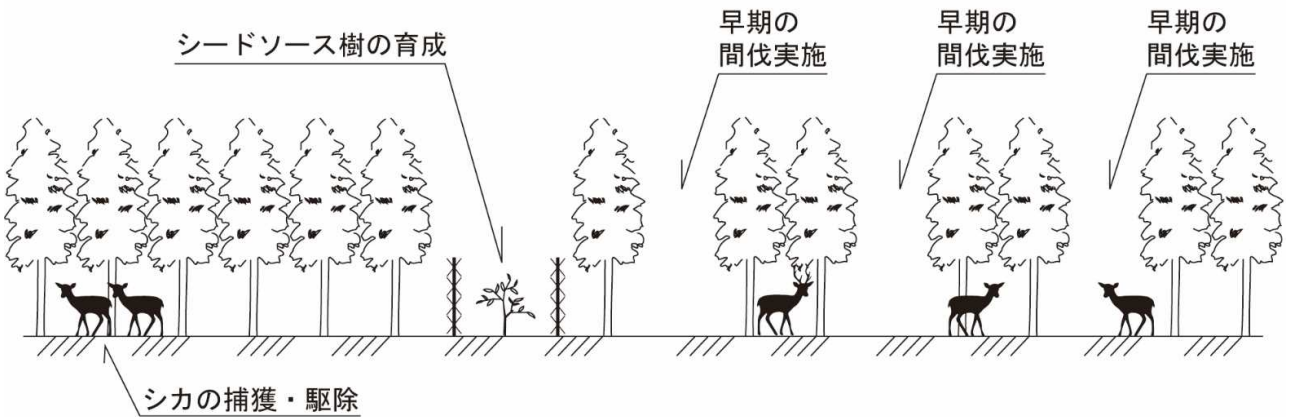
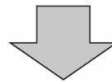
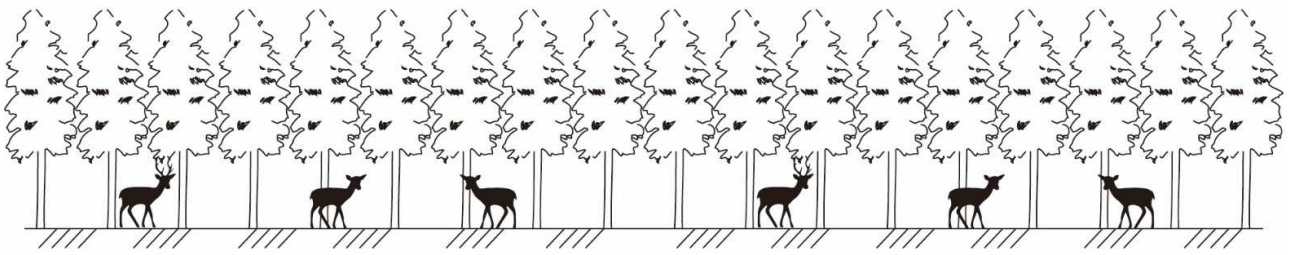
- ニホンジカの生息密度が低減し、森林被害が見られなくなった時点で、主伐の実施を進める
- 植栽樹種は、高木性広葉樹を検討する。天然更新している高木性広葉樹については積極的に保残する



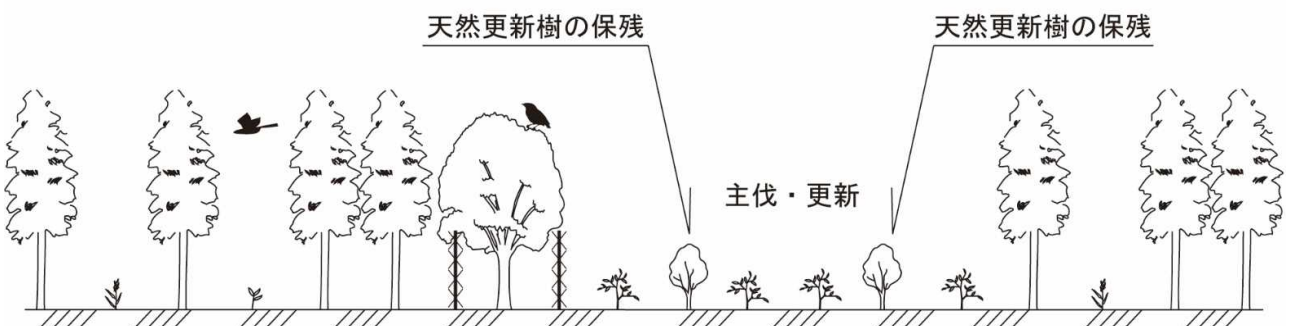
※水源涵養タイプのスギの単層林・複層林

沖ノ山地区における施業イメージ

ステップ1：シカ食害下での取組



ステップ2：シカ駆除後の取組



「基準・指標」及び「調査項目・調査手法」の検討

平成28年度のモニタリング調査マニュアル改訂を受け、平成30年度に今後のモニタリングでの評価に用いる「基準・指標」及び「調査項目・調査手法」を暫定的に作成していた。

今回、行動指針(案)を作成したことに伴い、「基準・指標」及び「調査項目・調査手法」についても再整理を行った。

主な再整理点

- 東中国山地緑の回廊のテーマである「人工林の針広混交林化」を踏まえて「デザイン」に関する基準を見直した。

「緑の回廊としての機能を発揮可能な森林が維持されている」



「人工林の針広混交林化が順調に進んでいる」

- 基準に係る調査項目として下記を設定した。
 - ✓ 針広混交林の分布状況調査
 - ✓ 自然ギャップ地の広葉樹の生育状況調査
 - ✓ シードソース樹の生育状況調査
- ニホンジカによる被害状況の調査に保護林モニタリング調査で実施している「植生概況/詳細踏査」と「植生多様度調査」を取り入れた。

モニタリングにおける評価の「基準」

【東中国山地緑の回廊に求められる機能】

多様な樹種・林齢等からなる森林環境により、多様な野生動植物の生息・生育地となり、森林生態系を保全する機能

○基準（案）

基準1. 『人工林の針広混交林化が順調に進んでいる』
→デザイン

基準2. 『多様な野生生物の生育・生息場として継続的に利用されている』
→価値

基準3. 『森林環境教育等の場として活用されている』
→利活用

基準4. 『適切な管理体制が整備されている』
→管理体制

モニタリングにおける評価に用いる「指標」

基準1. 『人工林の針広混交林化が順調に進んでいる』

基準2. 『多様な野生生物の生育・生息場として継続的に利用されている』

【モニタリングの着目点】

・森林施業が針広混交林化を進めるにあたって効果的なものとなっているか
・針広混交林化を阻害する森林被害が発生していないか

・野生鳥獣の繁殖・交流・餌資源の利用の場となっているか

○指標（案）

指標1. 『針広混交林化の進行状況』

指標2. 『森林の被害状況』

指標3. 『野生鳥獣の種類・構成状況』

モニタリングにおける評価に用いる「指標」

基準3.『森林環境教育等の場として活用されている』

基準4.『適切な管理体制が整備されている』



【モニタリングの着目点】



・森林環境教育等の場として国民にとって活用しやすい環境となっているか

・生物多様性の保全等に向けた取組、普及啓発、巡視が適切に行われているか



○指標(案)

指標4.『森林環境教育等の場としての活用状況』

指標5.『生物多様性の保全等に向けた取組、普及啓発、巡視状況』

指標1に係る「調査項目」

指標1.『針広混交林化の進行状況』

【評価の観点①】

針広混交林の分布状況はどうか

【評価の観点②】

自然ギャップ地に侵入・生育する主要な広葉樹は何か

【評価の観点③】

シードソース樹は順調に生育しているか



○調査項目(案)

調査項目①

針広混交林の分布状況調査

調査項目②

自然ギャップ地の広葉樹の生育状況調査

調査項目③

シードソース樹の生育状況調査

指標1に係る「調査手法」

指標1『針広混交林化の進行状況』

- 〈評価の観点①〉 針広混交林化している林分の分布状況はどうか
- 〈調査項目①〉 針広混交林の分布状況調査



衛星画像から各小班の針葉樹と広葉樹の混交割合を調査

○調査手法(案)

・資料調査

衛星画像等を用いて、各小班における針葉樹と広葉樹の割合を調査し、混交割合で区分した分布図を作成

・聞き取り調査

森林管理署等から、森林施業による針広混交林化の進行状況を聞き取る

・現地調査

資料調査を行った上で、針広混交林化の進行状況を現地でも確認

指標1に係る「調査手法」

指標1『針広混交林化の進行状況』

- 〈評価の観点②〉 自然ギャップ地に侵入・生育する主要な広葉樹は何か
- 〈調査項目②〉 自然ギャップ地の広葉樹の生育状況調査

○調査手法(案)

・自然ギャップ地調査

踏査ルート上で確認される自然ギャップ地を調査地点とし、実生や稚樹の発生状況の記録や調査地点の状況の写真撮影を行う

独自様式 自然ギャップ地調査		
緑の回廊名	署、国有林名	林小班名
東中国山地緑の回廊	兵庫署、畑ヶ平国有林	438林班に小班
地点No.	調査年月日	
No.2 (全地点数: 5地点)	令和3年8月3日	

調査を行った自然ギャップ地		
GPS	N: 35° 26' 55.94"	E: 134° 27' 13.77"

自然ギャップ地のスケッチ (形・大きさ)

自然ギャップ地の写真 (遠景)

No	ギャップ地内で見られた実生・稚樹・草本等		群度	高木性	備考 (健全性や食痕、写真番号など)
	種名	種名			
1	ブナ		2	○	健全、写真番号 1
2	ハウチワカエデ		2	○	健全、写真番号 2
3	イタドリ		2		食痕、写真番号 3
4	ナガバモミジイチゴ		3		食痕、写真番号 4
5	ミズナラ		2	○	健全、写真番号 5

※群度 (1:単体のみ、2:ポツポツ点在、3:まだら状、4:カーベットに穴、5:カーベット状)

見られた実生・稚樹等の写真

写真番号 1
種名: ブナ

写真番号 2
種名: ハウチワカエデ

写真番号 3
種名: イタドリ

調査票 (案)

指標1に係る「調査手法」

指標1.『針広混交林化の進行状況』

〈評価の観点③〉 シードソース樹は順調に生育しているか

〈調査項目③〉 シードソース樹の生育状況調査

○調査手法(案)

・シードソース樹生育状況調査 (シードソース樹を植栽後に実施)

シードソース樹の樹種、胸高直径、樹高等の計測及び開花結実状況や病虫害の有無等の生育状況を記録し、個体の状況を写真撮影する

独自様式			シードソース樹生育状況調査		
緑の回廊名		署、国有林名		林小別名	
東中国山地緑の回廊		鳥取署、沖ノ山国有林		5 6 林班よ小班	
地点No.		調査年月日			
No.1 (全地点数:10地点)		令和7年10月5日			
調査を行った地点					
GPS	N:	35	°	15	'
	E:	134	°	22	'
基本データ					
伐採範囲	30 m	×	30 m	植栽樹種	ミズキ
植栽密度と本数	3000 本/ha	、	270 本	植栽年と林齢	令和 3 年、 5 年生
施業履歴	下刈 (R4~7)				
調査データ					
平均樹高	2.3 m	平均胸高直径	4.5 cm	(樹高が胸高に達していない場合は根元径)	
開花	なし	結実	なし	枯死木	20 本
病虫害害:気象害等		なし (具休詳細)			
特記事項					
シードソース樹の写真					
遠景			近景		
開花・結実状況等			枯死木・病虫害害等		

調査票(案)

指標2に係る「調査項目」

指標2.『森林の被害状況』

【評価の観点①】

森林被害は発生しているか
被害状況はどの程度か

【評価の観点②】

ニホンジカによる森林被害は発生しているか
被害状況はどの程度か
今後森林に被害を及ぼす可能性があるか

○調査項目(案)

調査項目①

森林被害の発生状況調査

調査項目②

ニホンジカによる森林被害
状況調査

指標2に係る「調査手法」

指標2. 『森林の被害状況』

〈評価の観点①〉 ・森林被害は発生しているか
 ・被害状況はどの程度か

〈調査項目①〉 森林被害の発生状況調査

○調査手法(案)

・資料調査

衛星画像等により裸地やナラ枯れ等の森林被害状況を確認

・植生概況／詳細踏査

踏査ルート上で森林群集としての異常(種組成・階層構造の異常や森林被害)を記録し、詳細調査ポイントにおいてより詳細な調査を実施

1. 調査林分の属性情報

踏査ルートNo	詳細調査No	緯度	経度
1	2	35度26分28.4秒	134度26分45.0秒
標高	方位	斜面傾斜	森林群集タイプ
1175m	S	12°	クロモジ・ブナ群集

2. 林冠層

地上高 (m)	被度 (%)							
18-20m	50%							
生存木 主要構成種名	直径階 (cm)							
	<10	10-20	20-30	30-40	40-60	60-80	80-100	>100
ブナ			1		7	3		
枯死木 主要構成種名	直径階 (cm)							
	<10	10-20	20-30	30-40	40-60	60-80	80-100	>100
ブナ					1	1		

3. 重高木層

地上高 (m)	被度 (%)
8-10m	10%
主要構成種	
ブナ (保護対象種)	

4. 第一低木層

地上高 (m)	被度 (%) A
5-8m	50%
主要構成種	
ブナ (保護対象種)、オオカメノキ、ハウチワカエデ、タムシバ、アオダモ、コシアブラ、コミネカエデ	

5. 第二低木層

地上高 (m)	被度 (%) B
1-2m	60%
主要構成種	
チシマザサ、ブナ (保護対象種)、ハウチワカエデ、アオダモ、コミネカエデ、マルバマンサク、オオカメノキ	

6. 草本層

地上高 (m)	被度 (%)
< 0.5m	20%
主要構成種	
ブナ (保護対象種)、オオカメノキ、ハウチワカエデ、タムシバ、アオダモ、コシアブラ、コミネカエデ、チゴユリ、ツタウルシ、コミヤマカタハミ、ヤマソテツ、ツルアリトオシ、イワガラミ、アクシバ、ハイイヌツゲ	

7. 地表層

リター層の被度%			
>90	90-75	75-50	<50

表層侵食の強度%			
<10	10-25	25-50	>50

8. 林分の健全性の状況

被害の種類	被害内容の詳細
シカ害	強度の採食圧により、チシマザサの衰退傾向が見られる
シカ害	下層植生に強度の採食圧がかかっている(足跡、糞痕多数)
その他	ブナ枯損木は古いもの

植生詳細踏査の調査票 (案)

指標2に係る「調査手法」

指標2. 『森林の被害状況』

〈評価の観点②〉

・ニホンジカによる森林被害は発生しているか
 ・被害状況はどの程度か
 ・今後森林に被害を及ぼす可能性があるか

〈調査項目②〉 ニホンジカによる森林被害状況調査

○調査手法(案)

・資料調査

林野庁や環境省、地方公共団等の調査データを基に分析

・植生概況／詳細踏査

シカの食害状況(下層植生の衰退、立木の剥皮、土壌侵食、SDRランク)等を記録

・植生多様度調査

溪畔部にルートを設定し、草本植物を中心に多様度を調査

様式任意6

保護林名: 扇ノ山ブナ希少個体群保護林	調査年月日: 令和2年10月13日		
多様度調査No: 1	調査者: (株)一成 渡辺		
始点座標: 35度26分19.2秒	134度26分48.4秒	終点座標: 35度26分23.6秒	134度26分44.7秒
地点概況: <input type="checkbox"/> 尾根部 <input type="checkbox"/> 平衡斜面 <input checked="" type="checkbox"/> 谷部 <input type="checkbox"/> その他()			
低木層の状況等: マルバマンサク、コミネカエデ、ハウチワカエデ、サワフタギ			
備考: シカによる採食圧が強くかかっている。多様な植生が残存しているのは、シカの口が届かない壁面上に限られている。			

No	出現種名	頻度	群度	備考(健全性や食痕、写真番号など) ※希少種・位置・範囲・個体数等
1	ブナ	3	2	
2	ハウチワカエデ	3	2	
3	イワガラミ	3	3	
4	コカンスゲ	3	3	食痕
5	ウワバミソウ	3	2	
6	タムシバ	3	2	
7	ジュウモンジシダ	3	2	食痕
8	リョウメンシダ	3	2	
9	イヌツゲ	3	2	食痕
10	リョウブ	3	2	食痕
11	ミヤマカタハミ	2	2	
12	コミヤマカタハミ	3	2	
13	シシガシラ	3	2	食痕
14	コバノフユイチゴ	3	2	
15	ミヤマシシガシラ	2	2	壁面のみ
16	オオイタヤメイゲツ	3	2	
17	クサアジサイ	3	2	壁面のみ
18	ヤマソテツ	3	2	食痕
19	サワフタギ	3	2	食痕
20	オオカニコウモリ	3	2	壁面のみ
21	ミス	3	2	食痕
22	トチノキ	2	2	壁面のみ
23	イタドリ	3	2	壁面のみ
24	シラネウラボ	3	2	
25	オククルマムグラ	2	3	壁面のみ

※頻度(1:出現頻度1回のみ、2:2回~5回、3:5回以上出現)

※群度

(1:単体のみ、2:ポツポツ点在、3:まだら状、4:カーペットに穴、5:カーペット状)

植生多様度調査の調査票 (案)

指標3に係る「調査項目」

指標3.『野生鳥獣の種類・構成状況』

【評価の観点①】

哺乳類の種類や構成に顕著な変化が見られないか

【評価の観点②】

鳥類の種類や構成に顕著な変化が見られないか

○調査項目(案)

調査項目①

哺乳類の生息状況調査
(特にノウサギの出没状況に注目)

調査項目②

鳥類の生息状況調査
(特にヒヨドリやメジロ、ツグミ類、ヤマドリの出没状況に注目)

指標3に係る「調査手法」

指標3.『野生鳥獣の種類・構成状況』

〈評価の観点①〉 哺乳類の種類や構成に顕著な変化が見られないか

〈調査項目①〉 哺乳類の生息状況調査
(特にノウサギの出没状況に注目)



ツキノワグマ (三室国有林)



ノウサギの糞 (畑ヶ平国有林)

○調査手法(案)

・資料調査

林野庁や環境省、地方公共団体等の調査データを基に分析

・自動撮影調査

センサーカメラによる確認

・フィールドサイン調査

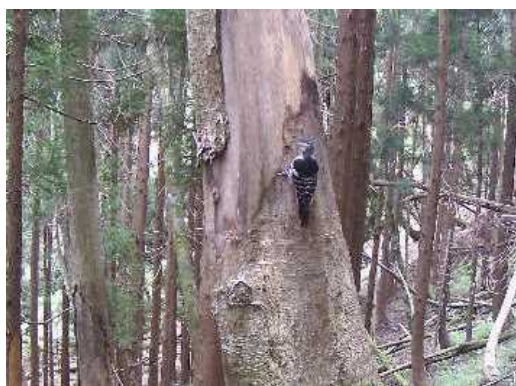
踏査ルート上の痕跡を記録

指標3に係る「調査手法」

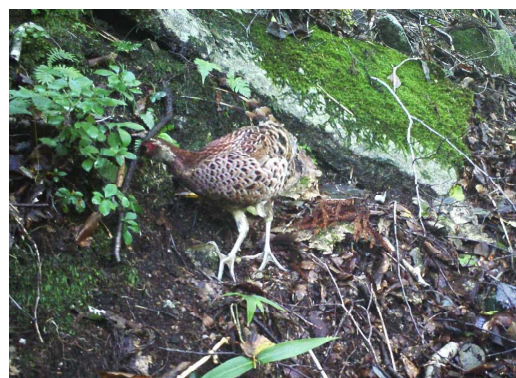
指標3. 『野生鳥獣の種類・構成状況』

〈評価の観点②〉 鳥類の種類や構成に
顕著な変化が見られないか

〈調査項目②〉 鳥類の生息状況調査
(特にヒヨドリやメジロ、ツグミ
類、ヤマドリの出没状況に
注目)



アカゲラ (ハサリ国有林)



ヤマドリ (沖ノ山国有林)

○調査手法(案)

・資料調査

林野庁や環境省、地方公共団体等の調査
データを基に分析

・鳥類調査

スポットセンサス法により確認された種を
記録

指標4・5に係る「調査項目」

指標4『森林環境教育等の場
としての活用状況』

指標5『生物多様性の保全等
に向けた取組、普及啓発、
巡視状況』

【評価の観点】

森林環境教育等の場として活用
されているか

緑の回廊の設定目的や課題に
対応した管理体制、事業・取組
となっているか

○調査項目(案)

森林環境教育等の場と
しての活用状況調査

外来種駆除、生物多様性保全
に向けた事業・取組実績、普及
啓発の実績、巡視の実施状況
調査

指標4に係る「調査手法」

指標4『森林環境教育等の場としての活用状況』

〈評価の観点〉 森林環境教育の場として活用されているか

〈調査項目〉 森林環境教育の場としての活用状況調査



過去に実施されたワークショップ

○調査手法(案)

・資料調査、聞き取り調査

インターネット等の利用、森林管理署や各県等の各種関係機関への聞き取りにより、森林環境教育や観察会、ツアー等のイベント情報を収集・整理

指標5に係る「調査手法」

指標5『生物多様性の保全等に向けた取組、普及啓発、巡視状況』

〈評価の観点〉 緑の回廊の設定目的や課題に対応した管理体制、事業・取組となっているか

〈調査項目〉 外来種駆除、生物多様性保全に向けた事業・取組実績、普及啓発の実績、巡視の実施状況調査

(タマガワホトギス)



(オオシラヒゲソウ)



巡視により確認した希少種

○調査手法(案)

・資料調査、聞き取り調査

インターネット等の利用、森林管理署や各県等の各種関係機関への聞き取りにより、緑の回廊での外来種駆除、生物多様性保全に向けた事業・取組実績、普及啓発の実績、巡視の実施状況を整理

基準・指標(案)一覧表

緑の回廊の機能評価の観点	基準	指標	モニタリング調査項目		モニタリング調査手法	
			評価の観点	調査手法の区分		
デザイン	人工林の針広混交林化が順調に進んでいる	針広混交林化の進行状況	針広混交林の分布状況調査	針広混交林の分布状況はどうか	資料調査	衛星画像等を用いて、各小班における針葉樹と広葉樹の割合を調査し、混交割合で区分した分布図を作成する
					聞き取り調査	森林管理署等から、森林施業による針広混交林化の進行状況を聞き取る
					現地調査	資料調査を行った上で、針広混交林化の進行状況を現地でも確認する
			自然ギャップ地の広葉樹の生育状況調査	自然ギャップ地に侵入・生育する主要な広葉樹はなにか	自然ギャップ地調査	踏査ルート上で確認される自然ギャップ地を調査地点とし、実生や稚樹の発生状況の記録や調査地点の状況の写真撮影を行う
		シードソース樹の生育状況調査	シードソース樹は順調に生育しているか	シードソース樹生育状況調査	シードソース樹の樹種、胸高直径、樹高等の計測及び開花結実状況や病虫害等の生育状況を記録し、個体の状況を写真撮影する	
		森林の被害状況	森林被害の発生状況調査	・森林被害は発生しているか ・被害状況はどの程度か	資料調査	衛星画像等より裸地(崩壊地・伐採地等)やナラ枯れ等の森林被害状況を確認する
					植生概況/詳細調査	踏査ルート上で森林群集としての異常(種組成・階層構造の異常や森林被害)を記録し、詳細調査ポイントにおいてより詳細な調査を実施する
			ニホンジカによる森林被害状況調査	・ニホンジカによる森林被害は発生しているか ・被害状況はどの程度か ・今後森林に被害を及ぼす可能性があるか	資料調査	林野庁や環境省、地方公共団体等の調査データを基に分析する
					植生概況/詳細調査	植生概況/詳細調査実施時に、シカの食害状況(下層植生の衰退、立木の剥皮、土壌侵食、SDRランク)等を記録する
					植生多様度調査	溪畔部にルートを設定し、草本植物を中心に多様度について調査する

基準・指標(案)一覧表

緑の回廊の機能評価の観点	基準	指標	モニタリング調査項目		モニタリング調査手法	
			評価の観点	調査手法の区分		
価値	多様な野生生物の生育・生息場として継続的に利用されている	野生鳥獣の種類・構成状況	哺乳類の生息状況調査	哺乳類の種類や構成に顕著な変化が見られないか(特にイヌワシの餌資源となるノウサギの出没状況に注目する)	資料調査	林野庁や環境省、地方公共団体等の調査データを基に分析する
					自動撮影調査	踏査ルート周辺にセンサーカメラを設置し、生息する野生鳥獣を記録する
			鳥類の生息状況調査	鳥類の種類や構成に顕著な変化が見られないか(特に液果類の鳥散布者であるヒヨドリやメジロ、ツグミ類等、イヌワシの餌資源であるヤマドリの出没状況に注目する)	資料調査	林野庁や環境省、地方公共団体等の調査データを基に分析する
					鳥類調査(スポットセンサス法)	スポットセンサス法により確認された種を記録する
利活用	森林環境教育等の場として活用されている	森林環境教育等の場としての活用状況	森林環境教育等の場としての活用状況調査	森林環境教育等の場として活用されているか	資料調査、聞き取り調査	インターネット等の利用、森林管理署や各県等の各種関係機関への聞き取りにより、森林環境教育や観察会、ツアー等のイベント情報を収集・整理する
管理体制	適切な管理体制が整備されている	生物多様性の保全等に向けた取組、普及啓発、巡視状況	外来種駆除、生物多様性保全に向けた事業・取組実績、普及啓発の実績、巡視の実施状況調査	緑の回廊の設定目的や課題に対応した管理体制、事業・取組となっているか	資料調査、聞き取り調査	インターネット等の利用、森林管理署や各県等の各種関係機関への聞き取りにより、緑の回廊での外来種駆除、生物多様性保全に向けた事業・取組実績、普及啓発の実績、巡視の実施状況を整理する